

「あんたさ、一体どういうつもりなの？」

窓辺から差し込んでくる眩しいほどの夕陽が、放課後の教室に四人分の影を落としている。

私——青海葉月は今、クラスメートの女子三人から詰問を受けていた。

ああ、本当に……どうして、こんなことになってしまったのだろう。

「いつもいつも男子とばかりつるんでさ。流石に見境なさすぎ。男だったら誰でもいいわけ？」

私の正面に立ち、腕を組んで特に鋭い視線を飛ばしている彼女は、クラスの所謂中心人物だった。あまりこういう言い方は好きじゃないのだけれど、まあ言ってしまえばカーストトップの女子。

彼女の左右に控えている二人も、いわばこの子の取り巻きだった。

そんな三人が、放課後に私を教室に呼び出して、先ほどから何やら意味不明な発言を繰り返している。

手のひらと背筋に、じんわりと汗が浮かんだのが分かった。

「何とか言いなよ——このクソビッチ」

クソビッチ。それはもしかして、私のことを言つたのだろうか？

何でだろう。意味が分からぬ。ビッチといふのは、誰彼構わず男と寝てしまうような、言い方は下品だけれど股の緩い女を指して使う言葉でしょ？

だったら私はそれに該当しないはず。何故なら私は生粋の処女で、それどころかまともに男子と付き合つた経験すらないんだから。

そんな私に向かつて“ビッチ”だなんて的外れもいいところ。だからこそ私は何か言い返してやろうと腹の奥に力を籠め、唇を開きかけて……寸でのところで、やめた。

そもそも何で彼女たちは私に対し怒りを覚え、こんな風に責め立てるような真似をしているのだろう。

その疑問を考察した時、考えられる結論はたつた一つだけだった。

要するに、彼女たちは私のことが気に食わないのだ。

私、青海葉月は、小さいころから女の子にそぐわないサバサバとした性格をしていた。自分で言うのもなんだけど、どちらかといえば男の子っぽい性格をしていていたようだ。だから、幼少の頃から女子と遊ぶよりも、男子と遊ぶ機会の方が多かった。だって、そつちの方が私の性分的に楽しかったから。

気が合わない人と遊ぶよりも、気が合う人と遊んだほうが楽しいのは語るまでもない当然のことだろう。そして、楽しいことと楽しくないこと……どちらかを選べと言われたら楽しい方を迷いなく選ぶのもこれまた人として当然のことだ。

女子と遊ぶことが嫌なわけでも嫌いなわけでもなかつたけれど、単純に男子たちの方が私と気が合つたし、何より楽だった。素の自分を晒すことができた。乐しかつた。

ゆえに必然、私は女子の友達が少なく、男子の友達が多かつた。

それは幼稚園、小学校の頃からずっと変わらず、だから中学に入つてからも自然と男子たちとつるむ時間が多くなつて、男子の友達が沢山できて……

でも、中学生という多感な時期。思春期とも言い換えられるそんな年代だからこそ、それをよく思わない一定数の人間が現れる。

それが目の前の彼女達だった。

中学生や高校生という年代は、異性というものを人生で一番意識する時期だ。

ゆえに、男子とよくつるんでいる私は彼女達から見たら“不純物”だつたのだろう。“異物”とも言い換えられるかもしれない。

そこに加えて、これは後から聞いた話なのだけれど、私はその性格から同じクラスの男子たちからとてもモテていたらしい。

私としてはそんな実感はまるでなかつたし、クラスの男子をそういう目で見た覚えは一瞬たりとて無かつたと断言できるんだけど……そのことも、彼女たちにとつて私を見過でせない要因の一つだつたらしい。

端的にまとめると、「何男子たちに色目使つて媚びてるのよ、このビッチ。氣色悪いからいますぐやめなさいよ」……彼女たちが言いたいことは、こんなところだらうか。

彼女たちが私のことを敵視しているのはつまりそういうことであり……

だから、ここで正論を言い返したところで彼女たちは納得しないだらうなど私は考えた。

私は真実ビッチじやないけれど、彼女たちの中ではそう結論付いてしまつていい。彼女たちの中でビッチの烙印が押され、そう決定づけられてしまつた以上、その私がいくら反論を繰り出したとて、彼女たちの中の判決が覆ることは、もうこの先どうやつたつてあり得ない。

唇の先まで出かかっていた反論の言葉が急速に萎しほんでいったのはそのためだ。

彼女たちには、もう何を言つたって無駄だ。言葉は、心の芯には届かない。

何故なら彼女たちは私のことが“気に食わない”だけだから。“邪魔”なだけだから。彼女たちの胸中に満ちている真実は、たったその一つだけ。

私の弁なんて聴きたくもないし、言つたところで何の意味もなさないのだろう。だって彼女たちの真実はもう自分たちの中で完結してしまっているのだから。

ゆえに私は、この瞬間にすべてを諦めた。

正直に生きていくことを。自分らしくありのまま生きていくことを。

飾らないまま生きていくって、その度にこんな風に傷つけられるのなら……最初から、傷つかないように偽装すればいい。

ありのままの自分を否定されるのはごめんだ。それはだつて、「お前なんか生きてる価値がない」と言われるに等しいことだから。

しかもその生き方で、周りの人が迷惑をこうむるのなら……もはや選択の余地なんてないでしょ。

だから、私は……

「——うん、分かった。これからはそういうこと、やめるね。嫌な思いさせちゃって、ごめん」

絶叫する本音を押し殺して、張り付けた仮面の笑みで目の前の女子たちに言葉を返すのだった。

こうして私は、本来の自分を作り物の仮面で隠していくことを決断する。  
曰く、猫を被つて生きていくことを選択するのだった。

……思えば、作り笑いが得意になつたのは、この日からだつたような気がする。



中学を卒業してから、私の猫かぶりはより本格的なモノへとなつていった。 まず私は、万人受けする性格というものを徹底的に研究した。

なるべく誰からも嫌われず、疎まれない、皆に好かれる高嶺の花……

本来の自分を隠し通すため、私は清楚系クール美女という仮面を被つて学園生活を送ることにしたのだった。

結果として、私の猫かぶりは大成功だつた。

見た目だけは清楚系クール美女の皮を被つていたものだから、誰も私の猫かぶりを疑わない。どころか、自分で言うのもなんだけど、私は男子からも女子からも絶大な人気を誇るようになる。

中学の頃では考えられないほどの人望と信頼を獲得し、高校生活は順風満帆で平和に流れていった。

……そう。逆に言えば、それだけだつた。

順風満帆で平和なだけで、何も楽しくない。それが高校生活のすべてだつた。

だって、みんなが見ているのは猫を被つた私なんだ。偽物の私なんだ。

誰も仮面の下の私のことなんか知らない。そもそも、みんなが期待して求めているのは作り物の私の方なんだ。本来の私なんてお呼びじゃない。

どうせちょっとでも顔を出したところで、みんなはすぐさま失望の顔を浮かべるだろう。またクソビツチつて糾弾するのだろう。

そう、知っていた。知っていたのよ。ありのままの自分を晒したつていいことなんかなあって。あの日の経験から、痛いほどわかつていた。誰も、ありのままの私なんか望んじやないい。

猫かぶりの日々は、正直最初の頃は本当に苦しかつた。

なんで自分で自分を押し殺さなくちゃならないんだろう。なんでこんな窮屈で痛い思いをしなくちゃならないんだろう。

私、ずっとこうやって自分を隠して生きていくしかないのかな？ それで本当にいいの？ それは本当に、生きているって言えることなの？

私は、本当はどうしたいの？ これが、本当に私の望んだことの答えなの……？

何度も悩んで、家で一人枕を濡らして……心を抉る耐え難い激痛に、喘いで、呻いて、悲鳴を上げて……

……それでも、人間というものは慣れていく生き物だ。

それは心の痛みにおいても例外じやない。

絶え間なく連続する痛みの中で、徐々に私の心は麻痺していった。痛みに慣れたというより、いつの間にか感じなくなってしまっていたのだ。

猫を被るということに慣れてしまつたゆえの、怪我の功名というやつなのだろう。

私にとつて猫を被るという行為は、もはや呼吸をするも同然の行為になつていたのだ。素の自分を晒したいという思いも、それに比例するように鳴りを潜めるようになつて……

そうして私は理解する。

この世はなべて仮面舞踏会なのだと。

みんな、この生き辛い世界を上手に生き抜くために、巧妙に本来の自分を殺している。仮面を被つてそれっぽく踊つて、ぼろが出ないように必死になつてているんだ。

何も猫をかぶっているのは私だけじゃない。みんな上手くガワだけ取り繕つて、嫌われないよう、そして自分が傷つかないように、表面上だけの薄っぺらい人付き合いを演じている。

私は最初、それを悲しいことだと思つていたけれど……生きるためにには必要なことなんだと割り切つてからは、すんなりと受け入れることができた。

そうして、かつて感じていた苦痛や悲嘆を置き去りにしたまま、私は無色透明な青春の日々を流れ作業のように過ごしていった。

猫かぶりがバレないよう。誰からも嫌われないように。本来の自分を悟らせないように。何より自分が、傷つかないように。

演じて、嘘をついて、猫をかぶつて、愛想笑いをして……そんな味気ない日々の繰り返し。

そんな日々を繰り返しているうちに、私はすべての人間関係がどうでも良くなつていつた。

だつて、嘘まみれの付き合いに何の意味があるの？ 本物じやないなら、そこには大した価値なんて宿らない。

だから、私は投げやりになつた。人付き合いに対しても。自分の猫かぶりに關しても。どうでもいいや、つて思いながらも……私は来る日も来る日も、演じ続けた。

猫をかぶつた、青海葉月を。

そうして、365日の日々はあつという間に過ぎ去つて……気づけば私は、二年生になつていた。

彼と出会ったのは、その時だった。

始業式が終わって、新クラスの顔合わせの時。隣に座っている彼の顔を見て、私は何の気なしに挨拶を交わした。

「青海葉月です。一年間、クラスメートとしてよろしくね」

もはや慣れすぎて顔面に定着してしまった愛想笑いを浮かべながら、私は当たり障りのない言葉を吐き出した。

そう、どう足搔いても一年間は付き合っていくのだ。表面上だけの付き合いとはいえ、愛想よく接するに越したことはないだろう。

そんな私の営業スマイルを受けて、彼は。

——ああ、こちらこそよろしく。

と、人好きのしそうな笑みを浮かべて挨拶を返してくれた。

これが、私と彼のファーストコンタクト。

これから、ずっと同じ時間を共にしていくことになる……最愛の人との、逢瀬の瞬間だつた。

それから、隣の席ということもあって私と彼はよく話すようになった。  
話していくうちに、趣味が似通っていることも分かつていった。

特に、漫画やゲームの趣味がドンピシャだつたには驚いたつけ。

そんなこんなで、一緒に過ごしていく時間が増えていくつて、私達は友達という間柄に自然となつていつた。

すべての人間関係を諦めていた私にとって、この出来事はまさに青天の霹靂だった。  
今までどんな人ともそれなりの距離を保つて、深く関わろうとはしなかつたのに……

彼だけは、いつの間にか、自分でも気づかないうちに友達という関係を構築していたのだった。

……それでも私は、自分の本当の姿を晒すという真似だけは絶対にしなかった。

だつて、それをしたらまた自分が傷ついてしまうから。彼が、不快になつてしまふから。せつからく仲良くなれたのに、その友情を壊すことだけは絶対にしたくなかった。

……それがたとえ、嘘偽りの上で成り立っている友情だととしても。

……そう。彼と過ごす時間は楽しかった。

高校に入つてから初めて、人と接していく楽しいと感じたんだ。

だから同時に、そんな一緒にいて楽しいと思える相手に本当の自分を晒せないのは悲しいことだと、久方ぶりに胸の痛みを強烈に自覚した。

本音の自分で、本当の自分で彼と接することができたら、どんなにいいだろう……  
そう思つたことは、一度や二度じやなかつたけど、でも、しようがないわよね。

私が猫をかぶることでこの関係性が平衡に保たれているなら……そのバランスを崩す真似を、わざわざしてやる必要なんてどこにもない。

だから私は、今日も猫をかぶる。

彼との平和な時間を、一秒でも長く感じていたかつたから。

その時間が、無味乾燥とした私の高校生活の、唯一の救いだつたから……

◆  
「ああっ、そっち行つたわよ！ 罠仕掛けで！」

その日の放課後、私と彼は教室に残つてゲームをしていた。

携帯ゲーム機を対面で突き合せ、画面の中のモンスターを協力プレイで狩つてゐる。

夕陽が差し込む放課後の教室には私達しか残つていなくて、二人分の必死な声とボタンをガチャガチャと操作する音だけが賑やかに反響してゐた。

私の操作するキャラクターの元から逃亡したモンスターの直線上。そこには彼の操作するキャラクターが待ち伏せをしていた。

私の合図を聞き届けるや否や、彼は素早くボタンを動かし罠を設置する。

作動した罠にモンスターが動きを封じられている隙を突き、私と彼は阿吽の呼吸で武器を叩き付け、ターゲットの体力をガリガリと削つていく。

そして、やがて画面の中のモンスターは一際甲高い雄叫びを上げると、そのまま力尽きたように地面に倒れるのだった。

「やつたあつ！ クエストクリアねつ！」

二つの画面に浮かぶ「クエストクリア！」のご機嫌な文字列に、私達も思わず歓喜の声を上げてハイタッチを交わした。

「ようやく倒せたわね、私このモンスターの素材がずっと欲しくて――……あつ」

そして、そこで私は重大な失態に気づくのだった。  
彼と過ごす時間が楽しすぎて、思わず猫かぶりを忘れてしまつっていたのだ。

荒げていた声は当然彼にも聞かれていたはずで、猫をかぶつている私はそんな声を上げるキャラでは断じてない。違和感を持たれていても不思議じやない。というか抱いているはずだ、間違いなく。

ああ、もう本当に何をやつているのか。今更こんな初步的なミス……どう誤魔化してものかなあ、と彼の横顔をチラリと伺つてみる。

すると彼は……まったく気にした様子もなく、画面の中の倒れたモンスターを見ながらただ純粹に嬉しそうな表情を浮かべていた。

……どうやら、ゲームに熱中するあまり私の態度の変化なんて眼中になかつたらしい。

ほつと安堵の息を吐く。命拾いした……彼が鈍感で本当に助かつたと強く思う。

ともあれ、これからはより一層注意しなきや。いつの間にか外れてしまっていた仮面を被り直して、私は何でもないように彼へと話しかけた。

「——じゃあ、次はどのモンスター行きましょうか?」

努めて平静を装い、いつも通りの清楚でクールな聲音を吐き出した。

そう、これが仮面を被った私の姿。人前で見せる青海葉月の姿だ。

仮面の下の本当の私のことは、何があつても気取られてはいけない。死ぬまで、猫をかぶり続けなきやいけないんだ。

それが、青海葉月の決めた人生の渡り方。生き方。今更曲げる理由なんてどこにもあるはずがなくて……だから、気のせいなんだ。

胸の奥が、チクリと痛むような感覚がしたのは。

胸中に生じた微かな違和感を力づくで押し込めて、嘘で編み込んだ涼しい視線を彼に飛ばす。

そこにはきっと、さつきと変わらない無邪気な笑顔を浮かべた彼の姿があると信じて……いたのに。

実際にあつた、彼の表情は。

「……え?」

思わず私は当惑の声を上げてしまう。

だつて、彼が浮かべていた表情は……間違이なく、困惑色のそれだったから。

え……? なんで、どうして? どうして、そんな信じられないものを見たような顔をしているの?

私、何か間違えた? 違和感のある言動をしてしまった? 演じ方を間違えた?

私が思わず素を晒してしまったタイミングでその顔をするならまだ分かるけど、何で、それを今するの……?

だつて私は今、完璧に猫をかぶっているはずで……そこを気取られたことなんて、この高校生活で一度だつて無かつたのに。

思わず言葉を失う私の顔を見て、何を思ったのか、彼は突然相好そうごうを崩して苦笑いを浮かべた。

そして、気遣うような優しい表情のまま、私に顔を近づけてきて……

——無理してない？

そう、口にしていた。

……無理？ 無理って、何のこと？ 私が、無理をしている？  
待つて待つて、彼は一体、何のことを言つてているの？  
……もしかして、彼は

唚然とする私に対し、彼は追い打ちを掛けるように唇を動かす。  
すべてを包み込む、優しいそよ風のような笑みを浮かべて。

——俺の前でだけは、嘘つかなくていいんだよ。

……そう言われて、私はようやく氣付いたのだった。  
猫被っていたの、この人には全部バレバレだつたんだつて。

だから、さつき私が無意識に素の自分を晒しても、この人は何の動搖も見せなかつたん  
だ。こ、ちが本当の私だつて、ずっと前から気づいていたから。

それは果たして、いつの頃からだつたのだろう。

よく話すようになつてから？ 友達になつてから？ それとも、もしかしたら……初め  
て言葉を交わした、あの日から？

分からぬ。分からぬけれど……分かつてゐることが、たつた一つだけあつた。

私は、この人に嫌われたくない。この人ともつと深く関わりたい。

中学のあの一件以来、私は人間関係というものを諦めていた。人と深く繋がることを諦  
め、ガワを取り繕つて表面上だけうまく付き合えていればいいやと思うようになつていつ  
た。

痛みに慣れて。苦悩に慣れて。ようやく……ようやく猫かぶりの自分が板についてきた  
と思っていたのに。

本当の自分をあつさり見破られた上に。嘘つかなくていいよ、だなんて……そんな優し  
い笑顔で言われたら、私、私……我慢、できないよ。  
だって私、本当は……本当は……

「……本当に、いいの？」

漏れ出た一言は、自分でもびっくりするくらいに震えていた。

怖い。怖い。また傷つけられるんじやないかって、仮面の下の弱虫な私が悲鳴を上げて  
いる。

やめろ、やめろ。どうせまた勝手に失望されて、嫌われて、彼もお前の元から去つてい  
く。

失つて傷つくぐらいなら、最初から手にしない方がいい。そうでしょ？

分かってる。分かってるのよ、そんなこと。  
分かっている、けれど……

「本当の私、女の子っぽくないわよ」

溢れる言葉を、止められなかつた。

「サバサバしてて、男勝りで。清楚のせの字もないような女の子で」

期待してしまつていてる自分がいる。

「嘘で塗り固めた青海葉月とは、似ても似つかない」

この人なら、もしかして、つて。

「きっと幻滅しちやう。きっと嫌いになっちゃう」

この人なら、ありのままの私を受け入れてくれるかもつて。

そう、だって私はずっと……“本当”の私を見つけてくれる人を、何よりも待ち望んで  
いたんだから。

すつと、“本当”の私を、見つけて欲しかった。

「それでも……それでも、いいの？ それでもあなたは……本当の私のままでいいって……言つてくれるの？」

伏せていた視線を上げて、夕焼けに照らされる彼の顔を真っすぐ見つめた。

その時の私は、一体どのような表情をしていたのだろう。今となつては、その答えを知るのは当時の彼だけだ。今の私が知るはずもない。

でもきっと、情けない顔をしていたんだろうなという予想はつく。

サバサバしていて男勝りと自分では口にしたけれど、これで結構臆病な性格だから。怖がりで、弱虫で、傷つくことを何より恐れて……だから、虚構の外装で自分を塗り固めた。もう一度と、本当の自分を否定されてしまわないように。

そんな自分の“本当”を、今日の前の彼に無防備に晒している。  
心臓が破裂してしまいそうなほど脈打っている。緊張のあまり吐いてしまいそうだつた。

けど……けれども、彼は。そんな私の深い不安を、一瞬で蹴散らしてしまってほどの爽快な笑みを浮かべて……

——当たり前だろ。俺が友達になりたいのは、“本当”的青海葉月だ。作られた青海葉月なんかじやない。

あまりにも、あつけらかんと言ふものだから。

——友達になろうぜ、青海。

「……うんっ。私、あなたと友達になりたい」

差し伸べられた手を握り返した瞬間、万感の想いと共に仮面の下から大粒の涙が流れてきた。

頬を伝うこの熱い雫は、断じて作り物なんかじやない。私がずっと求めていた、“本物”なんだと鮮烈に実感する。

こうして、私と彼は、本当の意味での“友達”となつた。

彼の前でだけ素顔を晒して、本当の自分を見せられる。

彼はそんな私に失望なんてすることなく、それどころか前よりもいい意味で遠慮が無くなつた。

本当の自分をさらけ出せるって、こんなにも幸せなことなんだ。そして、そんな自分を受け入れてくれる人が、隣に居るということも。

そして必然と言うべきか、以前にも増して彼と過ごす時間が比じやないくらいに増えていった。

放課後一緒にゲームして。一緒にゲーセンにいつたりして。お互いの家に行つて。休みの日に、デートなんかしたりして。

……だからそれも、必然だつたのかもしれない。

「……私、あいつのこと、好きだ」

一緒に過ごしていく時間の中で、気が付けば私は、彼のことを考えると猛烈に顔が熱くなるようになつていた。

締め付けられるように胸が苦しい。息が詰まる。でも、けれども、それと同じくらいの幸せな感情がお腹の底から湧き上がつてくる。

寝る前の時間。ベッドで横になりながら、彼の顔を思い浮かべた。彼の声を思い返した。メッセージアプリを開いて、わけもなく彼とのトーク履歴を見返した。一人で撮つたツーショット写真を、何度も何度も胸に抱いた。

「……好き。大好き」

大好き。大好き。好きなんだ。

口に出すたび、想いは鎮まるどころか、油を注いだ火のように一層激しさを増した。

溢れる気持ちが止まらない。バカになつてしまつた蛇口みたいに、際限なく甘い気持ちが零れていく。

彼ともつと一緒にいたい。彼ともつと触れ合いたい。彼ともつと、今以上の関係になりたい。

そんな願いが自分の内側で渦を巻くたびに、知らず私は涙を流した。彼のことを想うたび幸せな気持ちになるのは確かだつたけれど、それと同じくらいに胸が痛んだから。

「……誰かを好きになるって、こんなに痛いんだ」

だつてそうでしょう？

彼も私のことを好きだなんて保証、どこにも無かつたから。

ましてや私、こんなだし。サバサバしてて可愛げないし、女の子っぽい一面何てまるでない。

まあ、黙つていれば顔は清楚系だからそっち方面の心配はあまりないんだけれど……でもやっぱり問題は内面でしょ。

どうやってこんな色気のない女に惚れるつて言うのよ。ばか、ばか、私のばか。

こんなことならもうちよつと女子力磨いておくんだつた……

「……そうよね。私なんかが、あいつに釣り合う訳がない」

本当の私なんかを受け入れてくれた、とても素敵で優しい男の子。

あんないい男、他の女子が黙つていらないだろう。だったら私なんかよりもよっぽど素敵な女の子なんてこの世にごまんと溢れているわけだから、その子たちと結ばれる方がいいつも幸せ……

「……嫌。そんなの、嫌よつ……」

私以外の女の子の横に立つあいつのことを想像して、胸が先ほど以上に切なく締め付けられた。

身を裂くような激痛に、思わず全身を抱いてしまう。

いやだ。いやだ。あいつが私以外を選ぶなんて。

こんなの、傲慢だつて、ワガママだつてわかつていいけど……それでも止められない。好きつて気持ちに、嘘はつけない。今まで上手につけていた仮面を、うまく被ることができなかつた。

もう本当に……何なのよ、あいつ。

——俺の前でだけは、嘘つかなくていいんだよ。

あの日の言葉が、夕暮れに染まる教室と共に脳内にリフレインする。  
……嘘つかなくていい、って。あんたねえ……

「もうとっくに、あんたの前で嘘つくなんてできなくなってるっての……ばーか」

スマホの画面に映るあいつの笑顔に向けて、涙混じりの悪態をぶつけた。

いつの日か、私とあいつの人生みちが重なる日が来ますように。そんな大それた願いを、心

の中で呟きながら……



——好きです。俺と、付き合ってください。

夏休み明け。一学期が始まつて間もない頃。

夏の匂いがまだ色濃く残る放課後の教室で、私は彼に告白させていた。

「——つ……え……？」

彼の口から発せられた言葉の意味が分からなくて、思わず呆けた反応をしてしまう。

いや、だつて待つて……あいつ、今、私のこと好きだつて……？

実感が抜けない。現実感がまるでない。自分は今、都合のいい夢の中にいるのではない  
かと錯覚しかけてしまう。

遠くでひぐらしの喧しい大合唱が響いてきて、耳朶を殴りつけた。それで私は、これが  
夢ではないということを強く自覚した。

ふと彼の顔を覗いてみる。彼の顔にはちょうど窓から差し込む朱色の夕陽があたつてい  
て、その頬を真っ赤に染めていた。

……けれどきっと。私の自惚れなんかでなければ……その顔が赤くなっていたのは、残  
夏が滲む夕陽のせいだけじゃなかつたはずだ。

何よりも、私に向けられる真摯な瞳が告げている。

この想いは本物だと。お前のことが、心の底から好きなのだと。

そんな真っすぐで、熱烈な想いに撃ち抜かれたら……ああ……返す答えなんて、決まり  
きつてるでしょ。

「——私も、あなたのことが好き。大好き。

……こんな私でよければ、その……こちらこそ、よろしくお願ひします」

……その時のあんたの表情を、私はきつと生涯忘ることはないでしょうね。

泣き笑うようなくしゃくしゃな感情を浮かべて、感極まつたように私のことハグしてき  
て……

おおう、滅茶苦茶熱烈じやないって焦つたもんよ。若干引いたかも。  
ふふ、嘘よ嘘。本当にうれしかった。

ありのままの私を見つけてくれて。ありのままの私を受け入れてくれて。

そして――

「……ありのままの私を好きになつてくれて、ありがとう。私今、本当に幸せ」

確かに感じる温かい熱を抱き返しながら、こうして私達は恋人になつたのだった。



「……それからの時間は飛ぶように過ぎていったわね。

本当に……色々あった。一緒にゲームして、沢山デートもして……その分、沢山喧嘩もしてさ……

でもその度に仲直りして、ああ、やっぱり私はあんたのことが好きなんだなあって再確認して……

え、アンタも？ ふふ、やっぱり気が合うわね。私達。

エッチなことも沢山したわねー。そういうえばさ、ほら、覚えてる？ 高校の卒業記念で一緒に旅行した時さ、宿泊先の旅館で浴衣姿の私見て、あんたが我慢できなくなつて急に布団の上に押し倒してきてさー。でも私が負けじと押し倒して、逆に襲っちゃつたってやつ。

ふふふ、あれ今考えると傑作だつたわよねー。あの時のあんたの顔、可愛かつたなー

からかうように私が言うと、隣に居る私の大好きな人……あんたは、唇を尖らせながら照れ隠しをするように後頭部を掻いた。

ふふ。まったく、なんて話をしてるんだろう。今日は人生における一大イベントの日だというのに。

……そう。今日は、人生でたつた一度の大切な日。

私と彼の人生を一つに繋げる、大事な儀式の日。私と大好きな人の――

『それでは、新郎新婦のご入場です』

マイク越しの開会の一言が、会場全体に響き渡つた。

その合図を聴いて、私は隣に立つ彼へ改めて視線を飛ばす。  
この世の誰よりも愛している、あんたの方へと。

「――行くわよ、新郎様。ほら、背筋伸ばしてしゃんとしなさいっ」

弾むように言い放ち、翻る白磁の衣装を横目に見ながら、私はあんたと腕を組んだ。タキシード越しにあんたの腕の温かさが伝わってきて、ドキリと心臓が高鳴つてしまふ。やっぱり好きな人の身体に触ると言うのは、何回やつたって慣れやしない。何度だつて胸が高鳴るものだ。

それはあんたも同様みたいで、まるで初恋に落ちた少年みたいに初心に頬を染めている。

その反応を見て、私は……本当に、この人を好きなって良かつたと、もう何度も目になるか分からぬ想いを深々と噛みしめた。

二人揃つて頬を染めていると、そんなのはお構いなしに目の前の扉がゆっくりと開かれていく。

扉が完全に開け放たれる頃、割れんばかりの拍手喝采が、私達のすべてを祝福してくれていた。

そんな万雷の祝福を一身に浴びながら、私達は再び目を合わせる。

そして、互いに微笑み合うと同時に、まったく一緒のタイミングで足を踏み出すのだった。

……一步一歩、ゆっくりと。あんたの温もりと祝福の声を感じながら、噛みしめるようにバージンロードを踏みしめていく。

扉から祭壇までのこの道のりは、私達の今までの人生を表しているようだつた。長いようで短かつた……二人で過ごしてきました時間。その道のり。

だからこそ私は、赤い絨毯じゅうたんを踏みしめるたび、あんたとの思い出一つ一つに思いを巡らせて、万感の想いで噛みしめていく。

……あんたと出逢つた日のこと。あんたが私に「嘘つかなくていいんだよ」って言つてくれた日のこと。あんたが私に告白してくれた日のこと。初めてデートした日のこと。夏休みのこと。結婚しようつて言つたこと。プロポーズされた日のこと。全部、全部全部全部……一つ余さず、覚えてる。

それくらい、大事で掛け替えない思い出。全部大事。それくらいに、あんたのことを愛してる。

バージンロードをゆっくり歩きながら、あんたの横顔を盗み見る。

ステンドグラスから差し込む日差しを受けるタキシード姿のあんたは、本当に心臓が飛び出ちやうくらい格好良かった。

……もう。本当に、何回惚れ直させる気よ。ドキドキするこっちの身にもなりなさいつてーの。

今すぐ抱き着いてキスしたい衝動に駆られるけど……それは我慢。

だつて、本当の私を見せるのはあんただけって決めてるもの。みんなの前では、ね。本当の私なんか、晒してやんない。

本当の私は、あんただけのものなんだから。だから絶対、手放さないでよね。本

つて言つても、私もあんのこと、手放してやる気なんて毛頭ないけど。

「それではお二人とも、足元にお気をつけて」

そして気が付くと私達は、祭壇の前まで足を進ませていた。  
柔軟な笑みを浮かべる神父様の言葉に従い、ゆっくりと段差に足を掛けて壇上に上がる。

見るからに優しそうな初老の神父様は、私達の顔を交互にゆっくりと見つめると、歌う  
ように言葉を並べ始めた。

「新郎——あなたは、その健やかなるときも病める時も、彼女を心から愛し、真心を尽く  
すことを誓いますか？」

——はい、誓います。

あんたの泰然とした声が耳の中に溶け込んでいく。  
形式的な誓いの言葉だけれど、首肯したあんたの意思是、紛れもない本心なのだと、そ  
の声を聴いただけで私にはわかつた。

ああ、本当に。あんたを好きになつて、よかつた。

「新婦、青海葉月様。あなたは、その健やかなるときも病める時も、彼を心から愛し、真  
心を尽くすことを誓いますか？」

少し眉尻の下がつた神父様の瞳が、私の目線と重なつた。

優しいけれど、嘘は許さないという誠実そのものを鏡に映したような眼光。

そんな視線にさらされても、私はちつとも怖くないし、怯まなかつた。

確かに私は、嘘だらけの猫かぶり女だけど……それでも、彼に対してだけは、嘘がつ  
けない女だから。

つきたいとも、思わない。

「——はい、誓います」

だつて、こんなにも彼のことが好きなんだから。大好き。大好き。愛しているんだ。だから嘘偽りのない、等身大の気持ちを籠めて、私は神父様へ誓いの言葉を捧げた。私の瞳を覗きこむ神父様は、やがて満足そうに口角を緩ませる。

どうやら、神父様のお眼鏡に敵つたらしい。まあ、当然ね。だつて、彼に対する想いだけは、紛れもない本物なんだから。

「それでは、新郎新婦。誓いのキスを」

神父様に向き合つていた私達は、その言葉を皮切りに互いの方へ身体を向ける。

熱い視線が突き刺さる。想いの丈が伝わつてくる。  
愛しているという気持ちが、痛いほどに伝わつてくる。

……今更だけど、本当に私達、心の底から愛し合つているんだ。

私のことを愛してくれているのは誰よりも知つていたつもりだつたけど、やっぱり、改めて気持ちを知るとどうしたって嬉しくなつてしまふ。年甲斐もなく、心臓がドキドキして止まらない。

猫をかぶるのはあつという間に慣れたけど、こればっかりはいつまでたつても慣れないなあ。

でも、それでいいんだと心の底から私は思う。

だつてそれくらい、私達はお互いのこと、深く愛し合つているということだから。いつまでもときめく鼓動を感じてしまうくらい、お互いのすべてを愛している。

だから私は、微笑むあんたへ一步踏み出す。

胸に飛び込んで、肩に掴みかかった。そんな私を、あんたは優しく抱き留めてくれる。一気に顔を近づけた。唇と唇が触れてしまいそうな距離。キスしようとしてるんだから、当たり前だけれど。

この距離感は、何年たつても、何回繰り返しても、やっぱり照れてしまう。でも、同じくらい気持ちが弾んでしまうのもまた事実で。

そんな、鼓動が高鳴る距離を保つたまま、私はあんたの両目を見つめて、そつと呟く。

「ねえ。大好き。愛してるわよ」

今まで何度も伝えてきて……これからも、何度も伝えていきたい想いを……たつた  
一人、大好きな人に向けて。あんただけに、聴こえるように。

「——んっ」

熱く、深く。別々だった私達の人生<sup>みち</sup>が一つに重なるように、私達の唇が繋がった。

その瞬間、祝福の音色が私達の世界に鳴り渡る。

おめでとう。おめでとう。いつまでも幸せに、と――

言われなくとも、幸せになつてやるわよ。ていうか、あんたと一緒なら、この先の人生  
……どこまでも幸せな気持ちで駆けていけると信じてる。

だつて、ねえ、そうでしよう?

こんな嘘だらけの世界で、あんたは本当の私を見つけてくれた。

こんな嘘だらけの世界で、あんたは本当の私を好きだと言つてくれた。

こんな嘘だらけの私を……あんたは、私の隣がいいって、選んでくれたんだ。

そんないい男と一緒にだから、幸せになれないか全部嘘でしよう?

だから、ねえ。何度も伝えるわね。だつて本当に、何回言つたつて伝えきれないから。

「愛してる。ありのままの私を好きになつてくれて、ありがとう。私今、本当に幸せ」

猫かめんを外した私の満面の笑みと、それに応えるあんたの笑顔だけが、私達の世界を  
包む幸福な真実だった。

——大好き。いつまでも、ずっと一緒にいましちゃうね。

